



14000億の 星の群れ

twitter小説集 2

遍織

花の蜜

花の蜜が甘いのは、花卉の奥に住む小さな女の子の涙が混じっているから。ほとんどの場合、小鳥に啄まれ、あるいは蜂の巣に連れていかれて幼虫の餌になってしまう。でも万一、きみが蜜を吸ったとき、そこに女の子がいたら、彼女はきみの頭の中で王子様の夢を見るだろう。いつまでも。

鳥

朝の挨拶も、雨上りの喜びも、恋の高まりも、全て失われてしまった灰色の世界の中で、人々は己の心が小鳥に歌われていたものであることを知った。そして、鳥たちはどこへともなく飛び去った。

心

心を失った人々は劇場に列を成した。劇場に行くお金のない人々は、路上の歌い手の前に集い、僅かながら心を満たした。劇場から溢れでてくる笑いあう群衆に紛れて、彼らは密かに頬をゆるめ、胸のうちに授かった熱が逃げぬよう、コートをかきあわせ、俯きながら帰路についた。

愛の歌

あの娘の心は音楽の中にある。そう気づいた僕は音響係を買収して愛の歌を流させた。そういえばこの店では愛の歌を聴いたことがない。首尾よく二人きりになると娘は僕に夢中になり、手に手をとって逃げ出した。ずっと君のために歌い続けるよ。例え君が僕のいない静寂の中、心を閉ざしたとしても。

墓守

「穴を掘るのに飽きた」というと、供え物を拝借しにきた浮浪者が種をくれた。その晩、夢を見た。墓に埋めた種が芽吹き、棺桶を突き破って、腐った肉の養分を吸ってすくすく育つのを。緑に包まれた墓を見て所有者が俺を訴えた。管理を怠ったと。俺はゲラゲラ笑いながら砂漠に逃げた。

ナツ

「兄ちゃん、ナツが来るよ。さよなら言わなきゃ」海神の嫁に行く娘が小さな筏に正座して川を流されていく。着飾ったナツに僕は見とれた。だが兄は目を閉じて震えるばかり。青白い女達が仰向けに泳ぎ、筏を運ぶ。来年はその中に見覚えのある顔が混じる年齢になることに僕は気づいた。

化け物

網の隙間から藻の様に髪を揺らめかせた裸の背中に、波が打ち寄せる。無意識なのかその度に魚の尾が飛沫を跳ねる。「逃がそうよ」「バカな。こいつは人を海に引きずりこんで喰う化け物なんだぞ」「でもどうするの。殺すの」「喰うのさ」「だとしたら変わらないよ。僕らも、化け物さ」

お菓子の世界

蜂蜜が流れる黄金色の小川に沿って、キャンディの実る細工飴の草原を歩く。半壊したチョコレート
の城を目指して、ホイップクリーム
の街路樹に挟まれたスポンジケーキの階段を上がる。灼熱の太陽をパラソルで遮り、どろどろに溶けていく世界を赤い靴でスキップする、砂糖菓子の人形。

案山子

案山子よ、おまえの仕事はふらふらすることだよ。ふらふらと一本足で懸命バランスを取ること。鴉を追い返すのは、そうしないと困るからで、それは本質じゃない。鴉が腕に止まったら、左右のバランスが崩れる。おまえが地面ごとひっくり返って天と地があべこべになったら困るだろう？

言霊1

「ありました」隣の発掘現場に呼びかける。博士がレコーダーの準備をする間、手持ち無沙汰に問いかける。「どうして昔の人は地面に言霊を埋めたんでしょうか」「それがわかれば大発見なんだけどね」しっ、と人差し指を唇にあて、博士がスコップを動かす。＼王様の耳はロバの耳／

言霊2

「博士、古代の方法で言霊の作成に成功しました！」「ほう、ここを掘ればいいんだね」\好きだー！／「やはり、好意のような純粹で強い想いでなければ、うまく言霊にならない……きみの論文を証明したわけだ。……で、誰が好きなんだい。なんなら相談にのるけど」「結構です」

傘

駅前に根を生やして動こうとしない傘がおり、聞けば飼い主の帰りを待って、誰が「もう帰らないんだよ」と言っても耳を貸さないんだと。何年も何年も待ち続けてついに石のようになってしまった。今では駅で迎えを待つ人の雨宿として、あるいは待ち合わせ場所として重宝されている。

生け贄

石を食べる男がいた。男は皿一杯の石を頬張りながら、明日竜の生け贄にされるのだと言う。なるほど腹痛を起こさせるつもりか、と問うと男は首を振った。これは実験なのだ。どれくらい食えば死ぬのかの。生け贄は大岩に三人ばかりが縛り付けられ、石ごと丸のみにされた。死ぬ前の男曰く、実験の結果、後十年かかるということだった。

湖の女神

湖の女神が問う。あなたが落としたのはどちらの息子？ 次の日居間にはキレイな息子がいた。夜には妻も湖に突き落とした。キレイな家族に囲まれ私は満足した。だが次に目が覚めると、私は水中にいた。見慣れた顔の家族が微笑んでいる。ここの生活も悪くない。少し湿気っぽいけどな。

真名

「貴様の真名は調べがついている。いかに強大な魔法使いといえども、真名を知られては手出し
できまい」「ほう...」「お前の真名は、チチンポイポイグラマラサイダーー」「遅おい！」
ズガ！！「物理攻撃、とか.....ガク」

宝珠

村に祀られた大事な宝珠を、ある日子供が砂利石に混ぜて無くしてしまった。そんなはずはない、一番美しい石だと大人たちは探した。見つからずに困っていると、誰かがこれだと言って台座に乗せた。以後こんなことがないように覆いをし石造りの室に封じた。そして変わらず祈りを捧げた。

朝露に沈む街

朝露に沈む街の景色を、僕はどこかで見たことがあると思う。例えば、山頂の雲間から覗く空中庭園。例えば、住んだ湖面の水底に沈む朽ちた神殿。そこでは亡霊たちが彷徨い歩き、寒々とした目で僕を見つめる。そこでは視線が欠けているという点で、この場所に似ている。

石畳

幾何学模様の石畳が、歩く端から分離していく。半ば駆け足で結束を弱めた足場を飛び移り、やっと階段に辿り着く。下落していく階段を延々と駆け上がっていく。眼下には黒い淵が広がり、落ちていく石畳がまるで天の川のようにきらきらと瞬いている。

脱皮

会社の女の子が一週間程休んだ後、別人のように綺麗になった。「その顔どうした?」「脱皮したんです」「いや、整形だろ」「本当は、羽化したんですけど。だから今日は辞表を」窓の外で沢山の天使たちが空を登っていく。別の種族だと気づくのに時間がかかった。同性愛者は正しかった。

水のヴェール

流れ落ちる透明な水のヴェール。高圧の滝に手を差し入れる。指先から輪切りにされていくわたし。一筋の赤が滝壺に流れ込み、わたしは腕、胴体と滝の向こうに身体を滑り込ませる。青い空洞に透き通る身体でさ迷い出たわたし。細切れにされて下流へ向かうわたしは魚たちの腹を満たす。

この世でもっとも美しい

死んだように眠る君に、この世で最も美しいものを用意しよう。見渡す限りの花畑の寝台に横たえ、満点の星空の天蓋を被せる。星が流れだし、昼の世界にある遠くの頂に降る雨が、虹のかけ橋を伸ばす。そして、完全な世界に一点の汚点を添えるために、僕は君の隣で眠りにつく。永遠に。

悪夢

ベッドに身を投げた瞬間、柔らかなマットレスが身体を包み込んで沈み込んだ。底なしベッドだ！と思った時には、暗い穴を落ちている。寝間着の裾が風受けて丸く膨らみ、悪夢の底に軟着陸。あれほど気をつけていたのに、と歯噛みしながら、朝までにクリアすべき罫の数を数えている。

蛇

空と大地の間を這う群青色の蛇を、ある男が地の果てに赴いて殺したという。境界を縛りあげていた蛇が死に、境を失った世界が果てしなく引き伸ばされていく。雲が流れ落ち、続いて青が抜けていくと、ただただ黒い虚空だけが残った。次の朝の訪れと共に、大地は焼き尽くされるだろう。

尻尾

「タツヤ！ 人前で尻尾を両足の間に挟む癖やめなさい。みっともない。手でいじるのもダメよ。ちずる、歩くときは尻尾をあげて軽く左右に振るように、そう、引きずらないで！ ジュンイチ、知らない人に尻尾振っちゃいけないって何度言ったらわかるの、もう！」

ラプンツェル1

ラプンツェル、ラプンツェル、お前の髪をさげとくれ。と呼びかけると、塔の窓からそれぞれ五本のおさがが降ってきた。金茶赤黒白の髪――顔は見えない。金髪が一般的だが、トラップかも。とりあえず、キューティクルの傷んでいないのにしよう、途中で切れたら嫌だしと男は思った

ラプンツェル2

ラプンツェル、ラプンツェル、お前の髪をさげとくれ。するすると降りてきた髪に掴まり、塔の壁面を登り始める。窓まであと二頭身ほどに迫ったとき、窓から鬼の形相で顔を突き出す女に気づいた。この世のものと思えない悲鳴とともに女が窓から飛び出し、二人は地面に叩きつけられた。

ラプンツェル3

ラプンツェル、ラプンツェル、お前の髪をさげとくれ。若い男の呼び声に、喜びいさんで髪の本根に近い方をベッドの支柱に縛り付け、その先を窓から投げ下ろす。だが、待てど暮らせど誰も登って来ない。手繰り寄せてみると髪の手先2mばかりがぱさりと切り取られ持ち去られていた。

。

ラプンツェル4

ラプンツェル、ラプンツェル、お前の髪をさげとくれ！長さ200m、重さ1トンもの髪が雪崩をうって落下し、男は圧死した。

ラプンツェル5

貞子、貞子、お前の髪を投げとくれ。呼び掛けた途端、ドタッと井戸の縁に先を幾重にも縛って重い玉を作った黒髪が投げ上げられる。宙吊りの痛みに暴れ、壁にぶつかり引きずる感触を無視してカー杯引き上げる。やがて爪の剥がれた手が井戸の縁を掴む。

戦いの結末

「魔王よ、理不尽だとは思わんか？ こんな立場であるばかりに俺達は憎しみ合わねばならない」「それもそうだな勇者よ。お互い責任ある身だ。何もかもなかった事にはできまい。だがせめて最後はただの人として、戦おうではないか」そうして行われた戦いの結末は、名も無き男が勝った。

戦いの結末2

「魔王、お前を倒す！」「よく来た勇者よ。ところで、何故我々は戦っているのだろうか？」「知らんが、名前的にそういう展開だろたぶん」「なるほど、死ねえー！」「うおお！」そうして行われた激戦ののち、世界が平和になったかどうかは、今までの文脈がないのでなんとも言えない。

木曜日

「会いたかった！」「僕もだよ」「...あなた、誰！？」「誰って、金曜日さ」「違う、私にはわかる」「ふふふ、ばれたら仕方がない」「あなたは木曜日！ 金曜日をどうしたの」「一日大人しく俺の言う事を聞いていれば会えるさ」「誰がお前なんかと」「知らなければ幸せだったものを」

金曜日

「お疲れ」休憩時間にコンビニで声を掛けられる。「金曜日！」「仕事早く終わったから、これから一緒にどうかなと思って」「...ごめん。私今日残業なんだ」今日だけじゃないけど。「そっか。この店のコーヒーお前好きだろ。これ飲んで頑張れよ」まさか、残業って知ってて来てくれた？

流れ星 1

巨大な星が流れて、地上の人々はその引力に巻き取られて空に昇っていった。残されて初めて僕は、自分に質量がないことに気づいた。幽霊なんだ。そう思った途端、体が透けて地球の公転軌道に取り残されてしまった。黒々とした虚空で涙を溜める。さよなら、みんな。さよなら、地球。

知的生命体

地球に知的生命体が生まれた。木星人は仲良くしようと言った。土星人は奴隷にしようと言った。火星人は滅ぼして移住すると言った。月星人は放って置けと言った。議論は紛糾し、最終的に木星人の意見が採用され船団が向かったが、その間1億年が経過し、地球人は既に滅びていた。

標識

男は果てしない道のりを旅してきた。ひび割れ忘れ去られた道を、腐食し消えかけた標識だけを頼りに。瓦礫が道を分断し、標識だけがぼつねんと立っていた。男は標識の指す方へ爪先を向けた。生温い水が足首を浸し、三步で膝にかぶる。男は水平線まで続く水溜まりの前で立ち尽くした。

死人

死人が歩き始めて一年。片腕がなかったり、目玉が飛び出していたりする死人（否ゾンビ）が町を歩く光景にも違和感がなくなってきた。満員電車はさすがに腐臭がきついけど、労働基準法に引っかからない労働力として企業は重宝してる。何より働くために生きなくなったことが嬉しいね。

永遠の夏休み

現実の時間では一瞬、精神世界でほぼ永遠の時間を過ごすという「永遠の夏休み」。飽きるまでそこで過ごせる代わりに、飽いたらまた現実に戻らなければならない。だが不思議と、現実を生きるうちにまた夏休みに戻りたくなるらしい。夏休みは人生でただ一度きりなのに。

世界一周

生身で世界一周に挑戦した少年がついにゴールするというので、富士山麓には沢山の人とカメラが集まった。今か今かと待つ人々の間を秒速7.9kmの風が駆け抜け、斜面を登り、ゴールの山頂から遙か彼方に飛び出していった。人々はにこにこしながら少年を待ち続けた。

封

灰色の空の下、車窓から白い物質で覆われた凸凹の建造物が見える。「あれは？」「しばらく使われないから、封をされているのさ。街は放って置くとすぐ風化するから」どんな街だろう。「あそこに人はいるの」「ああ」連れは事もなげに答えた。「私が生きている間に封が解かれるかな」

節電

「地上の光が消えてくよ。こんな暗い夜は久しぶり」「光るためのエネルギーが足りないんだって。節電というらしいよ」「ぼくたちも節電した方がいいかな?」「私はソーラー発電だからいいんだよ」「ぼくは核融合発電でいずれ超新星爆発するけど安全対策すべきかな?」「無理だろ」

ロボットの心

心の代わりにロボットの胸に楽器を組み込んだ。単調なリズムがたどたどしいメロディを刻み始め、徐々に深みを増す旋律に人々は耳を澄ました。決して美しい音楽ではない。それがなんだというのか？ だが、プロのヴァイオリン奏者の演奏を聞いて以来、ロボットは奏でるのをやめた。

クラッシュ

人がクラッシュする瞬間は衝撃的だ。脳がショートして、煙が出てぶっ倒れる。昔の人間（本当の意味の）は壊れたまま動いて災いを起こしたから、派手に壊れる回路をわざわざ付け足したらしい。とはいえ、そんなレトロな死に方は嫌だから、解除コードをダウンロードするけどね。

光のヴェール

金色の光のヴェールに包まれて、気づいたらベッドにいたわ。外からわかるような傷は何もなかった。でも、わかるの。あの瞬間、輪切りにされたわたしが、光になって遠くの星に運ばれたのを。わたしは銀色の船の中を無重力で漂いながら、銀河の中心に引き寄せられるのを感じているの。

どこでもドア

世界中の「どこでもドア」が故障した。目的地以外に飛ばされ、会社に辿り着けない人が続出、電話が殺到してケータイもストップ。仕方がないから僕は、海岸線沿いの駅のホームで、二時間後の列車を待ってる。カモメが空を漂い、白い砂浜に波が打ち寄せる。とても清々しい朝だ。

帰り道

友達と話し込んだり、図書室に寄ったり、気まぐれな彼のために下校時間を調整している。偶然を装って話しかけるわけでも、帰宅道を外れて後をつけるわけでもなく、唯一同じ道のりを歩く100mで彼を追い抜くために。そのときだけは、彼は私を見してくれる。たとえ、後ろ姿だけでも

。

帰り道2

友達と話し込んだり、図書室に寄ったり、気まぐれな彼女のために下校時間を調整している。偶然を装って話しかけるわけでも、帰宅道を外れて後をつけるわけでもなく、唯一の同じ道のりを歩く100mで彼女を追い抜くために。そのときだけは、彼女は俺を見してくれるだろうから。

通り雨

うたた寝から目覚めると、外は暗くなっていた。雨が降っているのだ。慌ててサンダルを突っ掛け、傘を二本持って駅に走った。改札を出てきた夫は、わたしを見て吹き出した。「珍しいね。迎えに来るなんて」わたしは傘を身体の後ろに隠して家路を歩いた。その日は珍しく星が出ていた。

通り雨2

授業中に手紙が回ってきた。『三浦があんたのこと好きなんだって』「ねえねえ、どうする？」「どうもしないし、用事あるし帰る」校舎を出た瞬間、地面が濡れてるのに気づいた。「雨降ったんだ」「ホントだ、気付かなかった」三浦だ。彼は水溜りの道を走って行った。振り返らずに。

香水

雨の振り続く窓辺で、君の残していった香水を捨てたよ。懐かしい香りは夏の気配にのまれ、雨音に耳は塞がれた。その日ぼくは君と別れて初めて、セーターを脱いだ。凍えていたはずの身体はいつの間にか汗ばんで、裸の胸は空気と同化し、香水の空き瓶にはただ一粒の水滴だけが残った。

星空

「春はピンク、秋は赤、冬は白」「夏は?」「夏は嫌い。だって梅雨だもの。普通の雨しか降らないもの」彼女は口を尖らせて苦情を言った。「そうかな、もっといいものも降るよ。晴れの日なら」「晴れの日?」首を傾げる彼女の手を引いて外に連れ出す。そこには降るような満点の星空。

カレログ

私の彼氏は背が高くてイケメンで、気づけば女の子に囲まれてる。俺は浮気しないよっていうけど、心配だからカレログを入れた。.....昨日から彼がある位置から動かない。「何よこのマンション！ 誰の部屋なの!？」現場に押しかけて彼を詰問する。「君の部屋だよ」え？「結婚しよう」

鍵

幻想の引き出しにかかった鍵は、初恋の人の名前だった。恋が終わるとともに、引き出しには埃がたまり、次第に開かれることはなくなっていった。大人になり、初恋の人と偶然再会したとき、心の奥で密やかにカチリと何かが開く音がした。恋が再び開くことはなくとも、想いは蘇るのだ。

心臓

君の心臓が止まりそうなときには、僕の左手を切り落として、君の身体の中で君の心臓を動かし続けるよ。だから、君が胸を締め付けられるように感じたとしても、僕は隣にはいない。

言葉

「大嫌い」言葉は嘘をついた。嘘をついた言葉は、地に落ちて汚れてしまった。行き交う人に踏みだかれて、誰にも気づかれないまま、忘れられてしまった。変わり果てた言葉を拾い上げる者がいた。汚れを払われ、磨かれて、本当の姿を思い出した言葉は、再び空に放たれる。「大好き」

あれから1

「あれから、一体何があったの？」「戦争が起こって爆弾が落ちてきてお父さんとお姉さんと友達がみんな焼け死んで、あなたはショックのあまり記憶喪失に」「えっ」「でも安心して。タイムリープで戦争が起こる前の世界に戻ったから」「なんだ、よかった」「そう、全部思い出せる」

あれから2

「あれから」のことをよく考えている。四六時中、脳が擦りきれれるほど考え続けている。繰り返される2月29日の中で、すべては「あれから」の出来事であり続ける。過去も未来も現在も閉じ込められた「あれから」の中で、永遠に来ることのない「これから」のことを考えている。

あれから3

あれからあなたは、私を優しく抱いてトランクに乗せました。山奥まで一緒にドライブし、穴を掘って私を埋葬すると、暗い部屋に閉じ籠って一週間私の事を考え続けました。怖い顔の人たちに連れられて私を迎えに来た後、今度はもっと集中できる場所で私の事を想い続けるといいます。

あれから4

「あれから、いくつもの季節が廻った...春夏秋冬春夏秋冬」「要するに二年な」「春夏秋冬鯰」
「鯰って何!? 鯰って季節じゃないよね!?!」「春夏秋冬.....」「あ、戻った」「.....氷河期」「!?」
「さて、何年が経過したのでしょうか?」「知るかー!」

たくあん1

スポーツちゃんばらが流行ったとき、家が貧乏で剣の玩具を買って貰えなかった。落ち込む俺に母は手作りの剣を手渡した。柄の部分は段ボールだが、刃はソフトな手触りと黄金の輝きを備えていた。いざ戦場に現れた俺に級友は言った。「漬け物臭え」以来、俺のあだ名はたくあん剣士だ。

たくあん2

横たわる絞殺死体、相互監視のもと隔離される容疑者達。「捨てる暇などなかったはずなのに、凶器がないとは」「こんな時ですが、皆さん朝食にしましょう」「ご飯と味噌汁か。このたくあん美味しいなポリポリポリしかしやけに量多いし長いしでも美味しいポリポリポリーしまったああ！」

流れ星2

「きゃー、助けてー！」今日も地球で助けを求める声がある。「よし、今助けに行くぞ！」正義の使者は彼方の星より飛び立ち、地球に向けて降下する。大気圏突入の熱で光り輝くヒーローは今日も人知れず燃え尽き、誰の願いも叶わない。

流れ星3

流れ星は誰の上にも平等に降り注ぐ。確率的には、喫煙や交通事故のよりも死亡率が低いから気にしないという人もいれば、財産をつぎ込んでシェルターを作る人や、政府にレーザー防衛兵器の開発を求める人もいる。ただし、願いで相殺も可能だ。僕のところに落ちないでください。僕の...

流れ星4

塔の最上階で姫が額に石をめり込ませて死に、「空から石が降ってきたんだ！」と証言した農民の倅は粛々と処刑され、新型投石機説に押される形で開戦したのちの『隕石戦争』は、隣国の勝利で幕を閉じた。千年後暴かれた姫の墓に眠る石は鑑定の結果、地球上のものであると証明された。

ロゼッタストーン

「お客様、大切なデータのバックアップはお済みですか？ 当社のサービスですと、石版90t、二千年保証で料金たったの10億円！ 今ならロゼッタストーンのレプリカもついてきますよ。いかがですか？」

鉄道1

初めての山手線。初めての通勤ラッシュ。ギュウギュウに詰め込まれた人に挟まれて足が浮かび、電車の揺れに合わせて右へ左へ。ドアが開くと同時に流れ出る人の波にさらわれて、あれよあれよと運ばれた大都会のど真ん中で、ぼくはいまも漂流し続けている。SOSは誰にも届かない。

鉄道2

お尻に変な感触。ヤダ、これが噂の埼京線の痴漢ね。私は勇気を出してお尻を這い回るそれを捕まえた。「やめるにゃー」何これ人じゃないの？「ボクは埼京線妖怪だにゃ」妖怪？よく見るとちょっと可愛いかも。吃驚したけど、ちょっと安心して私は電車を降りた。「駅員さん痴漢です」

鉄道3

「さよなら、手紙書くよ」「うん...」涙を溜めた君の前で無情に電車のドアが締まる。動き出す電車に並走する君。ホームの端で君が宙を飛ぶ！ ドアの間隙に爪を食い込ませ、硝子に頬を押し付けてしがみつくと！ 風圧に歪む顔！ 涙の粒が飛び散り...電車がホームに滑り込む...笑顔の君...僕は...

鉄道4

地面に縫いとめられた赤錆た鉄の棒が、地平の果てまで続いていた。何処かに続くそれを辿る。数えきれない廃墟の街を超え、崩れかけたトンネルをくぐって、枕木の数だけ歩みを重ねて、どこまでもどこまでも歩き続ける。必ず、何処かにはあるはずだ。かつて、この上を走っていたものが。

傑作

山奥の作家のインクを奥さんが溢しちまった。冬の間は買いに行けない。怒った作家は妻の血を抜いて小説を書いた。奥さんは失血死しちまったが作品は完成した。春に編集に渡そうとすると、強い風が吹き乾いた血文字が残らず剥がれ落ちたそう。作家は今でも言うよ。あれは傑作だったと。

機械時計

お祖父様の形見の機械時計は、0時に赤いドレスの娘が現れてくるくる劇を踊るのです。弟はそれを観るときだけ昔を思い出すようです。ほら、もうすぐですよ。ポーン、ポーン、ポーン。さあ踊りましょう、一緒に。何故、秒針が動かないのかって？ どうでもいいでしょう、そんなこと。

君

テーブルの向かいから見た君は、いつも愛らしく僕に微笑みかける。マンションの二階から見送る君の姿は美しく、雑踏の中歩む君はすでに遠い人だった。飛行機から見下ろした君は都市の中の豆粒のような人にすぎず、宇宙から見た君はいるかいないのかわからない何かでしかなかった。

駅前のカフェ

見ろ、駅前のあの男。彼はああして可哀想な娘に手を差し伸べるのを待っているのさ。下心とか詐欺とかじゃなく、それが自分の役割と本気で信じている。そして毎日違う男が役割を果たしに来る。え、俺たちの役割だと？ すると男たちはそそくさと自分のカップを手にカフェを後にした

。

人魚

水中を漂う女は、わたしが溜め息をつくたび、肺に水を吸い込んで水底に沈むんだって。だからわたしは、なるべく浅く息をする。けれども女は、わたしが笑うと膨れ上がって水面に浮き上がり、網にかかって陸に打ち上げられるんだって。だからわたしは、水中を密かに泳ぐように生きる。

傍観罪

傍観罪が適用されてから誰もが人助けに躍起になったが、助けられたくない人間もいて自殺が急増した。私はやめろの大合唱を振り切って屋上から飛び降りた。何の非難も受けずに死ぬ方法が人を助けて死ぬ事だとは。潰れた二三人の上でヨロヨロと立ち上がり、また私は誰かを殺しに行く。

宝石

外科手術で身体に隠された宝石を求めて、一族郎党幼妻友人他人は骨と皮だけになった老人に群がり、疑心暗鬼と牽制の末、目出度く老人は寿命を全うした。遺言に従い弁護士は書類上存在しない宝石の相続に、公平なる籤を用意した。「では一切れずつお食べください」特大のミートパイ。

古本

奥の棚で埃を被っていた古い本を買った。活字を目で追いながら、次の頁に指を潜らせるとがさがさした感触が指をくすぐる。古い本だから汚れているのかと思い頁を捲るが何も無い。そしてまた次の頁でがさがごと。正体を求めて最後まで頁を繰り、私は自問した。何か見つけただろうか？

光

霧雨の中のハイビーム。泣きぬれた夜の街燈。天窓から差し込む月光。遠くの丘のサーチライト。空っぽのスポットライト。ここに届かない光はない。こちらに向かって、この胸を貫いていく、必ず。

夏

部屋の床の湿ったところから苔むしていく。やがて芽吹いた緑は夏の間成長し続けた。天井を突き破り雨が降り注いで、ぶよぶよした床が抜けたあとは、一階の娘と一緒に水没したベッドで眠った。秋は落ち葉の上掛けを得た。そして、冬にぼくは崩壊した部屋を出た。だから夏は嫌いだ

。

このまま眠り続けて死ぬ

眠くて身体が重い鉛になり、倒れたら地面にめり込んでしまって、そのまま脳みそが溶け出して地下水に染み込み、湧き出して蒸発して上の空でふわふわ漂い、雨になって落ちて地面に叩きつけられ、泥になって横たわり、そしてこのまま眠り続けて死ぬ。

孤独

「こうして毎日ツイッターでやり取りしているけど、きみたちが本当は存在しないことは知ってる。僕はこの惑星に機械たちとひとりきり。同じような人間が何億光年もの間に散らばってるなんておかしいだろ」「いや今まで黙ってたけど、存在してるの俺だけだから」「いや俺が」「私が」

出会い

駅のホームで人波に押されて荷物をぶちまける。「きゃっ」「大丈夫ですか？」よろける私を支えてくれる筋肉質な腕。涼しげな目元が私を見下ろし、白い歯を見せてニコツとする。ななんてイケメン！私が男だったら惚れてたなと思いながら、私は彼が拾ってくれた薄い本を受け取った。

赤い実

悪気はなかったわ。ただお婆さんの庭のルビーの木の実があまりに美味しそうだから、ひとつ取って食べただけなの。なのに毒を塗るなんて酷いわ、ねえお母さん？ お婆さんはわたしが悪いというの。お前が若くて美しいから。お前の頬があまりに赤く瑞々しいから。毒を塗ったというの

。

窓

この部屋に窓は一つしかない。それも目がやっと見える程度の細長い覗き穴だ。外では家を持たない者たちが、暑さと寒さに曝されながら助け合う様子が見える。向かいには大きな窓越しに涙を流す者がおり、かと思えば小さな窓から手だけを出して石を投げる者もいる。扉は見当たらない。

叔母さん

叔母さんはいつも麦藁帽にTシャツショーツパンで帰ってくる。僕は小学生みたいだとバカにしていたけど、或る年真っ白なワンピースでお見合いをした。結果は散々。お膳立てした両親とも喧嘩別れ。綺麗な足を隠したからだと教えるために、今年の夏は貯めたお金で僕が訪ねるつもりだ。

ツイッター崩壊

ツイッターが崩壊して一年、彼は未だネットの海で砕け散ったログの破片を拾い集めている。最早誰のものともしれない眩きを繋ぎあわせ、気の遠くなるような作業の果てに、彼女のTLを再構成できると。再構成しツイートする彼のTLにはいつしかファンが付き、彼は彼女になった。

ヘッドホン

ヘッドホンの音量をどんどんあげ続ける。自分を硬い殻で覆うように。不快な騒音はすべて消え去り、もう僕の耳には君の囁きしか届かない。「ああ？」「だーかーら！！」「なんじゃ、わかんね」「じーさんや.....(´・ω・`）」

駄作

これ以上駄作を書くのが辛いと思い詰めた作家が、神に願ったらしい。作品のできの悪さがすべて自分に返るように。死ぬ覚悟で挑めば名作ができるだろう！人の噂で彼の死は安らかだったと聞いた。

ロリコン

「ロリコンって何？」「不老薬が実用化に向けて世界的に様々な議論がなされたとき、強固に反対し続けた団体だよ」「何で反対してたの？ 宗教上の理由かな？」「さあ、詳しくは不明だ。ただ、どうしても実用化するなら、20歳以下は使用禁止の条項をなくせと主張してたらしいよ」

人助け

人集りの向こうが見渡せないので、隣の人に聞いた。少年が不良に絡まれて殴られたのだと。助けなければと人を掻き分けて前に出ると、少年たちがよってたかってふくろにされていたので、周りの人間を残らずのしたら、新手が後ろから次々やってきて、慌てて逃げた。人助けは大変だ

。

ゆうちゃん

「ゆうちゃん、今日は学校でどんなことがあったの？」「別に」「何もないわけないでしょ」「普通だよ」「特別なことじゃなくてもいいから教えて」「今日は一人でいたよ。理科の実験でペア組むときも一人だった。でもそれは『特別なこと』じゃないからな！」「ゆうちゃん……ううっ」

訛り

「おめえ、どこのもんだあ？ 聞かない訛りだべ」「遠いところから来たっちゃ！」「おらこの訛り知ってる。ちなみに恋人のことは何て呼ぶけ？」「ダーリンだっちゃv」「ほら間違いねーべ！」「ちげえ、おめーの想像はちげ！ 二次元は実体化しねえ！」「下着はトラ柄だべ！」ビリビリッ「スタンガン...ガク」

生前葬

黒服の群れの前で喪主が台に上る。「皆様、わたくしの葬儀にご参列頂き、有難うございます」「なんだ、今流行の生前葬か」「生前葬ではございません」梁に通した縄がスルスルと降りてくる。「ではさようなら」手際のいい介添人が故人を棺桶に収める。「皆様、ご焼香をお願いします」

幻肢痛

切り落としたはずの頭の幻視痛が収まらない。そもそも幻視痛を感じているはずの頭はもうないので、幻視痛自体が幻覚に違いない。切り落としたはずの頭の幻視痛という幻覚に悩まされている自分は頭を持っている道理だ。そう、痛みから逃れる方法は一つ。頭を切り落とすしかない。

パクリ論争

現実「いい加減お前ら俺のことパクるのやめろ」恋愛もの「現実が甘くないのが悪い」歴史もの「失敬な史実よりリアルだ」ミステリ「現実の殺人犯はトリックより山に埋める」FT「物理法則が違うのでパクリではない」SF「未来のことだから、むしろお前がパクリ」

やってくる

レンガ造りの家々が並ぶ通りをバタバタと雨戸の閉ざす音が通りぬけ、木立の梢から追い立てられるように鳥たちが飛び立つ。残された枯葉はただはらはらと舞い落ち、地面をさらう風が吹き溜まりへと誘う。コートをかき合わせた人々は、足音だけを残して足早に去る。冬がやってくる

。

性格整形

性格整形が流行ってるらしい。中には整形を堂々と公言している人も！ 私もウジウジした性格とおさらばする為に整形してみた。まるで生まれ変わったみたいにポジティブ！ 「実は手術に失敗したんです」って担当医にいわれたけど、笑って許せたもの。昔の私だったらあり得ない！

フクロウ

適度に温かいロッジの肉厚なソファで向かい合う。わたしとあなたの合間で踊る暖炉の火が片頬だけを温め、ガラス細工の影を壁に投げかける。梁に止まったフクロウのつがいの剥製が、送風機の風に煽られてフラフラとダンスする。そして、闇夜に沈みゆく窓辺を、枝がコツコツと打った。

twnovel占い

#twnovel を文頭に書く慎重派のあなた。フィクションであることを最初に断り、残り文字数もわかりやすいわ。文中に #twnovel を書くあなたは自己言及しちゃうおちゃめさん。一字少なくても構わないわ。意外性重視のあなたは、先入観を入れずに物語を始めて文末に #twnovel

14000億の星の群れ

<http://p.booklog.jp/book/32320>

著者：遍織

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/urano/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32320>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32320>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.